

15. 鶴林寺弁財天立像

立像の体部は割矧造りで、肩部には別材を当てている。宝冠・持物は金銅製で当初のものが残り（光背・台座は後補）、鎌倉時代の技工と優雅な表現を見せる像である。

16. 鶴林寺獅子頭

聖霊祭に用いられた獅子頭である。獅子の面部は彩色が施され、内部には朱が塗られている。下顎部は欠けているが、鎌倉時代のゆったりとした作風をもっている。

17. 永昌寺地藏菩薩立像

一木造りの立像で、背板を右肩によせて当てている。像の衣文の彫り線は摩滅している部分があり、左右の手首や足先、宝珠、錫杖、台座、光背などは後補である。しかし、少し長めの頭部、秀でた眉目、高い鼻など相貌は端正で、優雅な姿態を伝える平安時代後期の像である。

18. 鶴林寺地藏菩薩立像

二体とも一木造りの立像で、一体は右面部に欠けているが、体部は良好な状態にある。もう一体は、面部が荒れ、割れ目がある。二体とも左右手先を欠くが、右に宝珠、錫杖をもっていたであろう。この二像は、平安時代後期の優雅な作風を伝えている。

19. 神吉八幡神社祭礼絵巻

絵巻の奥書には文政三年（1820）とあり、当時の祭礼の様子が極めて鮮やかに描かれている。絵巻に見える行列は、小頭人を中心としたものと、大頭人中心にしたものに分けることができ、総数260人という盛大な祭礼が営まれたことがわかる。衣装、持物も詳細に描かれ、江戸時代の人々のいきいきとした姿を知ることができる。

奥書に「庚文政参辰葉月中旬寫、奇泉齋春脛書」とあるが、筆者については不明である。

20. 泊神社三十六歌仙図絵馬

絵馬奉納の風習は、近世以降になると、その図柄は馬に限らず人物や物語などを多彩になり、祈願や返礼のために寺社に奉納された。歌仙図は和歌の上達を願って奉納することが多かったといわれ、この付近では泊神社のほか、米田神社、小野市垂井神社にもあり、いずれも承応二年（1653）京都で作られている。

絵馬の裏書には、泊神社の願主である宮本伊織貞次と舎弟の小原玄昌が奉納した三十六歌仙図であることが記されている。歌仙絵の大部分は、狩野探幽の門弟と称する甲田重信が全て描いているが、歌については数人の筆になる。